

「夢の続き」

パナソニック・インパルスコーチ 倉本 卓哉 (35 期)

「社会人でアメフトやらへんか」

33 期仲山さんから突然の電話があったのは 2006 年 1 月下旬のことだった。仲山さんは私の 2 学年上の先輩で、学生時代には WR として関東 1 部リーグで名を馳せた名選手である。松下電工（現パナソニック）インパルスでは DL としての才能を開花させ、鉄壁の守備を誇る名門チームの主力として活躍していた。

「人のためになる仕事がしたい」という思いから消防士になることを目指していた私は、社会人でアメフトを続けようとは考えていなかった。しかし、仲山さんからの勧めで当時の松下電工インパルスの監督にお会いして話を聞く中で、「仕事とアメフトの両立」を掲げたチーム理念、配線器具や照明などさまざまな商品を通じて世界中の人々の生活にお役立ちするという企業方針に共感するとともに、私という人間を評価していただいたことに心を動かされた。日本代表級のメンバーが揃う DL 陣、日本一を目指すことができる環境、そして何より「文武両道」を追い求める姿勢に魅力を感じ、目の前にあるチャンスにチャレンジしたいと思う自分がいた。

アメフト選手として自分はどこまで通用するのか。また、横浜生まれ横浜育ちの私には親戚もない関西に行くのは大きな不安もあった。しかし、一度きりの人生、自分の可能性を信じ、松下電工へ就職して社会人でアメフトを続けることを決心した。

2007 年 4 月から大阪での実業団生活が始まった。平日は職場の方々と何一つ変わることなく勤務し、土曜日を含む週 3 回は門真市にある本社構内のグラウンドに集まって練習を行う。仕事もアメフトも全力で一流を目指す。だからこそ、その姿を職場の方々やお得意様が親身になって応援してくださり、その期待に応えるために更に頑張ろうと思う。社会人として、スポーツ選手として成長できる環境がそこにはあった。

社会人 1 年目、訳も分からずがむしゃらに駆け抜けた先に日本一が待っていた。ライスボウルを遠い世界のように眺めていた自分が、まさか東京ドームで学生王者の関西学院大学と日本一を懸けて戦うことになるなんて夢にも思わなかった。

翌年は社会人連覇を達成するも、ライスボウルでは立命館大学に敗戦。以降、チームは低迷が続いた。世代交代が進み、2011 年には副将としてチームを牽引するも結果を残すことはできず、自分自身も試合に出場する機会をなかなか得られずにいた。

2012 年に結婚。娘が生まれた。同期が次々と引退していく中で、「そろそろ潮時か」と思うこともあった。それでも、いつも近くで支えてくれている妻を東京ドームに連れて行ってあげたい、大舞台上で頑張っている姿を娘に見せたいというささやかな夢を叶えるために、現役を続ける覚悟を決めた。

自分自身と向き合い、食生活やトレーニングをゼロから見直し、変えられることは全て変えた。その努力が実を結び、試合で結果を残すことで DL の主力としてチームに貢献できるようになっていった。

社会人 9 年目の 2015 年、インパルスは社会人王者を決めるジャパン X ボウルへの出場権を得た。

相対するのは、ルイジアナ工科大学で活躍したアメリカ人QBコービー・キャメロンを擁し日本一連覇を目指す富士通フロンティアーズである。もがき、苦しみながら、ようやくたどり着いた東京ドームという最高の舞台。職場の方々やチーム関係者、ファンの方々、そして家族へ恩返しをするために、わがアメフト人生の全てをぶつけるだけだった。どんなに苦しい状況でも諦めず、腕一本でも掴んだチャンスを離すことなく、全員フットボールで勝利をたぐり寄せた。

翌 2016 年 1 月 3 日のライスボウルは立命館大学との激闘の末にリベンジを果たし、「パナソニック・インパルス」として 8 年ぶりに日本一を達成した。厳しい冬の時代を乗り越え、わがアメフト人生に大輪の花を咲かせた瞬間だった。

その後、私は 2017 年シーズンをもって現役を引退し、2018 年からはコーチの立場でパナソニック・インパルスに携わりながら夢の続きを追い求めている。これまで培ってきた経験を後世に伝え、自分を成長させてくれたアメフトに恩返しをするという想いを胸に、私は今日も「文武両道」を邁進していく。

